

## 〔研究ノート〕

## オンライン異文化交流の事例研究

## — A case study of online intercultural exchange —

山内 真理

## 1. はじめに

本稿は、2012年度および2013年度に実施した、本学の日本人学生と中国の日本語学習者との日本語による異文化交流プロジェクトの中間報告である。この日中異文化交流は「異文化コミュニケーション」をテーマとするゼミの授業活動として実施したが、その背景として、まず、異文化に対する関心、受容度や耐性がそれほど高いようには見えない学生たちに異文化接触を体験する機会を与えてみたいという動機があった。2011年度に試験的に交流活動を実施したところ、相手への興味・関心の喚起の点で、実体験、特に Skype による同期型コミュニケーションのインパクトの強さが観察された (Yamauchi & Jones, 2012)。そこで、同期型・非同期型コミュニケーションの双方を含む活動を授業カリキュラムに組み込む形で設計し直し、2012年度より本格的な取り組みを開始した (Jones & Yamauchi, 2013)。このオンライン異文化交流への活動状況を観察し、オンライン交流活動の設計および実施上の留意点を明確にすることが本事例研究の主目的である。

なお、筆者は2011年度より、ICT を活用し発信および交流活動を中心とした外国語学習についての実践研究に携わっており<sup>(1)</sup>、初中級 (low intermediate) の英語学習者を対象として、ブログ等による情報発信・共有・交流活動を組み込んだ授業の事例研究を行ってきたが (Yamauchi, 2011; Stout & Yamauchi, 2012; Yamauchi & Hashimoto, 2013)、現時点では、設備・パートナー選択・学習者の英語習熟度の点から非同期型コミュニケーションが中心となっている。本稿で報告する日中異文化交流プロジェクトは、同期型コミュニケーションを含む交流活動に関するノウハウの蓄積の面で、英語の授業での事例研究を補完する役割ももつ。

以下では、まず日中交流プロジェクトの実施概要を示した上で、この交流プロジェクトについて、学生の活動状況、同期型コミュニケーションの教育利用、技術的問題、交流活動の有用性について考察を加えていく。

## 2. 日中異文化交流

## 2.1. 実施概要

この日中異文化交流は「異文化コミュニケーション」をテーマとするゼミの授業活動として実施し、(1)日本と中国の間での文化的な違いや共通点を知り、両国間での理解を深め

---

(1) 本研究は JSPS 科研費23520696の助成を受けたものである。

る（異文化理解）とともに、(2)日本語を母語としない人々とのコミュニケーションを体験し（異文化接触）、そこで生じうる誤解や摩擦に自覚的になることを主要な活動目標とした。パートナーの中国人学生にとっては、(1)は共通しているが、学習言語を使って母語話者とのコミュニケーションを遂行すること自体が主要な活動目標となる。

2012年度、2013年度とも交流活動の実施期間は、9月末から12月にかけての9週間であり、「異文化コミュニケーション」ゼミの受講生と The University of Nottingham Ningbo China の日本語クラスを受講する中国人が参加した。交流活動の設計・実施に際し、日中双方の授業カリキュラムや、参加状況、技術的問題等を考慮し、教員間で綿密な打ち合わせを継続して行った。

交流活動のプラットフォームは、2011年度の試行をふまえ、日中両国で問題なく使え、双方の教員とも利用経験のある Moodle を採用した。Moodle の Forum を使った文字でのやりとりを活動の中心とし、プロジェクトの最初と最後に Skype での口頭会話セッションを実施した（図1）。



図1 Skype セッションの様子 (2013)

## 2.2. 活動設計

ここでは9週間の交流活動の設計について説明する。交流期間を、①関係作り、②異文化理解・異文化比較をテーマとするディスカッション、③振り返りの3段階に分け、各段階の目標に応じて個々のタスクを設計した。表1に示すように、全体的な流れは兩年度で共通しているが、2013年度は日中混合グループによる異文化比較リサーチを導入するなど、年度により細部は異なる。

表1 年度別活動概要

2012年度（コンピュータ実習室）	2013年度（普通教室；iPad 利用）
① 関係作り（知り合いになる）	
<b>【第1週～第2週】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 自己紹介：グループ用 Forum；スライドを投稿→相互にコメント</li> <li>● Skype：グループメンバー同士で</li> <li>● 異文化比較アンケート：Choice（Moodleの投票プラグイン）を利用</li> <li>● 自由交流：全体用 Forum（随時）</li> </ul>	<b>【第1週～第2週】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 自己紹介：グループ用 Forum；ビデオとテキストを投稿→相互にコメント</li> <li>● Photo Story：全員用 Forum；写真とテキストを投稿；日常生活について自由に</li> </ul> <b>【第3週～第4週】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Skype：グループメンバー同士で</li> <li>● 異文化比較アンケート：Survey Monkey</li> </ul>
② 異文化理解・異文化比較をテーマとするディスカッション	
<b>【第3週～第8週】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● グループごとに①のアンケート結果をふまえて質問し、回答し合う：テーマ別 Forum を使用</li> <li>● テーマ1：対人関係</li> <li>● テーマ2：コミュニケーションの特徴</li> <li>● 自由交流：全体用 Forum（随時）</li> </ul>	<b>【第5週～第8週】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● グループごとに①のアンケート結果をふまえてトピックを決め、リサーチを進める；Wiki, Chat を利用</li> <li>● Wiki：リサーチのまとめ・議事録</li> <li>● Chat：ミーティング手段の1つ</li> </ul>
③ 振り返り	
<b>【第9週】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Skype：グループにこだわらず</li> </ul>	<b>【第9週】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Skype：できるだけ多くの人と</li> </ul>
<b>【第10週以降：本学学生のみ】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 通常授業の Forum：レポート用メモ</li> <li>● 交流・文化比較レポート：(a)Skype での会話, (b)Forum でのやりとり, (c)異文化比較アンケートについての考察</li> </ul>	<b>【第10週以降：本学学生のみ】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 通常授業の Forum：レポート用メモ</li> <li>● 交流・文化比較レポート：(a)ビデオ投稿と Photo Story, (b)Skype での会話, (c)共同リサーチ作業, (d)リサーチ結果についての考察</li> </ul>

交流の各段階でのタスクについて補足しておく。第1段階を設定したのは、個人同士の関係がある程度できている方が、第2段階でのコミュニケーション活動が円滑かつ活発に進むと考えられるからである。画像・音声・映像を使うタスクに関する日本側でのねらいは、自己表現の工夫を促し、発信活動に負荷を加えることであった。2013年度の自己紹介ビデオ作成では（図2）、話すスピードや口調も意識させ、撮影した映像チェックや撮り直しも行った。また、異文化比較アンケートは、第2段階のグループ討論やグループ研究のトピックを引き出す助けとなるように、興味深い文化差が見られそうな質問を設定した（図3）。



図2 自己紹介ビデオの投稿（2013）

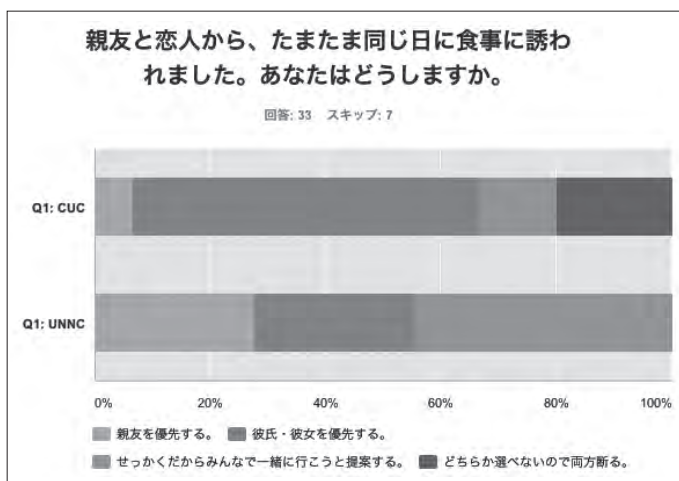


図3 異文化比較アンケート：質問 #12（2013）

第2段階は2012年度と2013年度の違いが大きい。2012年度のグループディスカッションは、メンバーがそれぞれ質問を出し他のメンバーが答えるという「1問1答」集のような形になったことから、2013年度は、グループでの同期型コミュニケーション（ミーティング）を必要とする状況を作りグループ内の「やりとり」を促すべく、グループリサーチを導入した。グループ内のコミュニケーション手段の1つとしてMoodleのChatを用意した（図4）。Chat以外にメールやLINEなどの利用も可とし、グループで使いやすい手段を選ぶようにと指示したが、どのグループもミーティングのためのメインの手段にはChatを選び、補助的にメールを使っていた。



図4 グループリサーチの相談（Chat を利用；2013）

第3段階およびその終了後、本学学生には、それまでの活動を振り返り、そこから学んだことをまとめる日中交流および文化比較に関するレポートを課した。これは学生に対し交流活動が授業の一環であることを明示するための課題であり、提出されたレポートは、学生が交流活動をどのように受けとめたか、そこから何を学んだかを知るためのデータにもなる。2013年度は同様の課題に加えて事後アンケートも実施する予定である。

### 3. 考察

以下では、2節で概観した交流活動について、学生の活動状況、同期型コミュニケーションの教育利用、技術的問題、交流活動の有用性の観点から考察する。

#### 3.1. Moodle での活動状況

交流期間中の9週間になされたMoodleでの活動を確認すると、2012年度は「表示 (Views)」が10,401件（1人平均254件）、「投稿 (Posts)」が1,207件（1人平均29件）、2013年度は「表示」が10,178件（1人平均275件）、「投稿」が2,255件（1人平均61件）であった（図5）。Moodleの活動統計では「投稿」にはForumの記事投稿だけでなく、Choiceでの回答（2012年度使用）や、WikiやChatの書き込み（2013年度使用）が含まれる。すなわち「投稿」件数は、学生がMoodle上で何らかの情報発信を行った件数ということになる。

図5にも示した通り、交流の第2段階にグループリサーチを取り入れた2013年度では「投稿」件数が倍増している。2012年度の「投稿」がChoiceの回答（異文化比較アンケート）も含むのに対し、2013年度の異文化比較アンケートは外部サービス（Survey Monkey）を利用したため回答が「投稿」としてカウントされていないことも考え合わせると、2013年度の活動設計は学生の発信活動を増やす助けとなったと言える。



図5 年度別の活動状況：「投稿」と「表示」

また、全体交流に関しても顕著な違いが見られた。本交流活動では、日中混合グループを設定し、そのグループ内でのコミュニケーションを中心に据えているが、グループ外の人とも広く交流してもらうための全体交流用Forumも設けている。「自由」にまかせた2012年度の利用件数（All Action）が330件だったのに対し、「身近な事柄について写真と1文を投稿」するよう指示した2013年度は、利用件数が1,283件となり3倍以上に増加した。



より明示的なタスクを含む交流活動の方が、自由度の高い交流活動よりも参加の動機づけ効果が高いとする Mullen らの指摘の通り (2009:107), リサーチのための打ち合わせなど目的の明確なタスクや、「写真+短い文章」のように条件を明確にしたタスクの方が、発信活動を促しやすいと思われる。

### 3.2. 同期型コミュニケーションの教育利用

同期型コミュニケーションとして2012年度に実施したのは Skype でのビデオ会話のみであるが、2013年度は、それに加えて、Moodle の Chat モジュールを使った文字による同期型コミュニケーションも取り入れた (2.2)。まず Skype の利用について、2012年度の学生の反応も参照しながら考察し、次に Chat の利用について、主に教員の立場から2013年度の利用を振り返る。

#### 3.2.1 Skype

映像付きの同期型コミュニケーションは、不慣れなために、戸惑いや気恥ずかしさで話しにくいと感じる学生もいるようだが、文字による非同期型コミュニケーションにはない臨場感が味わえるのは確かである。こうした受けとめ方がよく分かる2012年の学生からのコメントをあげておく。以下は同一筆者によるもので、(F)は交流直後の振り返り投稿、(P)は学期末レポートからの抜粋である。

文字で [自己] 紹介してみて、正直言うと恥ずかしくないの、言いたいことは言えました。スカイプだとカメラがあり恥ずかしくてあまり言いたいことが言えなかった。でも直接話した方が印象に残り、コミュニケーションをとっている感じがした。だから何回もやってなれてくれば、恥ずかしさはなくなるから、文字のいいところも含まれるからスカイプでやり取りがいいと思う。(F)

文字だと伝わりやすさに限界があると思った。私は実際、松嶋菜々子が好きな人と会話ができて、松嶋菜々子のことが好きなんですよ？と質問したら、満面の笑みで大好きです！家政婦のミタは全部見ました、と言っていてフォーラムで見るとはこんなに好きだとは思わなかったけど、スカイプするとこんなに好きだったんだと感ずることができた。(P)

映像付きの同期型コミュニケーションには、相手の反応がその場で分かるため、ミスコミュニケーションが生じた時も、その場で対応できる (あるいは、Forum 投稿などと比べて放置しにくい)。実際、表情やジェスチャーを使ったり、別の日本語を探したり、あるいは以下の学生のように英語を使ったりと、様々に工夫している様子が見られた。話が通じにくい相手とのやりとりを経験していない学生ほど、理解しよう、伝えようと工夫した経験は重要な学びにつながると考えられる。

スカイプでの会話では、正直あのような形で外国の方と面と向かって話すのは初めての経験であり少し戸惑いもあった。しかし実際に話をしてみると始めはなかなか聞き

取りづらかったが、日本語ではどうしても聞き取れないときは、英語を少し使ったりして会話することができた。(P)

学生の記述には、「スカイプを使用するのは初めてで、ちょっと戸惑ったけれども、相手に合わせてなんとか、コミュニケーションが取れたような気がする。相手の顔が見えるスカイプはいいものだ、と改めて思った」のように Skype 会話に対する満足感を重視するものもあれば、逆に「文字での会話は、質問してもすぐに答えが来るわけではないので、その点がデメリットであったが、直接言いづらいことなども質問出来て良かった」のように、非同期型のデメリットを認めつつも、その話しやすさを重視するものもある。また、「映像での交流は思っていたよりはるかに難しかった。ゼスチャーも映像では伝わりにくしいし、表情もうまく読み取れないからかなと思った」のように、伝える工夫がうまくいかなかったことがうかがえるコメントもある。2012年度の学生の記述にみられる「戸惑う」「恥ずかしい」「楽しい」「話しやすい・話しにくい」「伝わりやすい・伝わりにくい」といった反応について、また「伝えるため、理解するための工夫」について、2013年度は事後アンケートを使って確認する予定である。

### 3.2.2. Chat

文字による同期型コミュニケーションのメリットの1つとして、会話内容の記録が残る点があげられる。2013年度はグループリサーチの打ち合わせの手段の1つとして Moodle の Chat を用意したが、結果的に全グループが Chat をメインの手段として選択し、以下のようなミーティングのログを議事録やレポートの作成に利用していた<sup>(2)</sup>。

17:57 J\_Y : 「どのような点で先輩と後輩の関係を意識するか」の選択肢は色々考えてみます。

17:58 C\_C : 答え方は何でいいですか。選択ですか。書くですか。

17:58 C\_C : 例えば: yes no or 1) 2) 3)

17:59 C\_X : いいですか? じゃ、Tさんお願いします〜!

18:00 J\_T : Cさんの方法が答えやすいと思うので、良いと思います。

18:00 J\_T : Xさん、わかりましたー!!

18:01 C\_X : はい、私もそう思います! じゃCさんの方法しましょう。

18:02 J\_Y : いいですね

18:02 J\_T : 答えは用意しておけば、答える人は楽ですね。

18:03 C\_X : はい、そうですね。じゃ、みんなはいろいろな選択しを考える必要です〜

18:05 J\_T : いろいろアンケート内容が出ましたが、全て使いますか? いくつかにしますか?

18:05 J\_T : 私は全て使ってもいいと思います

18:06 C\_X : はい、私もそう思います〜

18:06 C\_Ch: じゃあ、全て使いましょう。

---

(2) ここでは、日本人学生はJ\_、中国人学生はC\_として区別している。

18:06 C\_C : いいよ  
18:07 C\_X : じゃ、みんなはぜひ自分の考えた問題を wiki に書いておいてくださいね。  
18:08 J\_Y : 選択紙ができたなら書いておきますね  
18:08 J\_Y : あ、選択肢です。間違えました。  
18:08 C\_X : はい、いいですよ。  
18:09 C\_C : わかりました

教員の立場では、必要に応じて会話内容を確認できる点が大きなメリットである。授業外のやりとりで何か問題あった場合でも内容が確認できれば対応がしやすい。ただし、今回の交流では、授業時間外でのミーティングはいずれも、上の例のように問題なく打ち合わせが進んでいたようである。

一方、授業時間をとって行ったミーティングでは時折ミスコミュニケーションが観察されたが、授業内では、Chat でのオンラインコミュニケーションと、授業参加者間同士および教員との対面のコミュニケーションを平行して行うことができるため、様々な形でミスコミュニケーション解消の手助けが可能になる。以下の例では、下線部で学生 J\_T が明確化を求める質問をし、学生 C\_R がそれに答えている。J\_T にとっては C\_R の答えは十分ではないのだが、話がそのまま進んでいくので「質問に答えてもらえない」と筆者に助けを求めてきた。このケースでは、筆者自身が Chat に入り J\_T が明確にしたかったポイントを代弁したが、Chat に入らずに会話をのぞいて「注意を喚起して、具体的に言い直す」ように助言する方法もある。

13:29 C\_Ch: 今日は役割を決めなければなりませんね。  
13:29 C\_X : そうですね。どうしましょうか。  
13:31 C\_Ch: 日本の方はどんなアイデアがありますか。  
13:34 J\_T : 役割ですが、僕は恋愛関係について調べます。  
13:35 C\_X : 先輩と後輩の恋愛関係ですか。  
13:36 C\_R : 恋愛関係はもうキャンセルしましたが  
13:38 J\_T : どうということですか？  
13:38 C\_Ch: 今日は時間が40分だけありますけど、  
13:39 C\_R : 今、先輩と後輩の関係だけあって  
13:40 C\_X : じゃ、私たちは中国人の「先輩と後輩が必要じゃない」という考え方の理由に調べます。  
13:42 C\_Ch: 日本の方は日本の「先輩と後輩の関係」のことを調べるのがいいですか？  
13:42 J\_Y : はい、私がそれについて調べる予定です。  
(略)  
13:45 Mari : あの、質問があります。  
13:45 Mari : 恋愛関係をキャンセルしたというのはどういうことですか？  
13:45 Mari : 調べるのをやめた、という意味でしょうか？

また、この Chat のデータは「異文化コミュニケーション」ゼミの素材としても面白い。



交流活動終了後にコミュニケーションプロセスを見直す、交流活動前にミスコミュニケーションの事例として紹介する等、様々な形で活用が考えられる。

### 3.3. 技術面の課題

上述の通り、本交流活動では学習管理システムである Moodle をプラットフォームとして採用した。中国側では両年度ともコンピューター実習室での実施であったが、日本側では、2012年度はコンピューター実習室、2013年度は普通教室で iPad を利用して実施した。

#### 3.3.1. Moodle

異文化コミュニケーションの授業の一環として行う本交流活動にとって、Moodle の利用は、互いの Forum 投稿、異文化比較アンケート及びその結果、中間段階での振り返り投稿（日本側のみ）、過去のグループチャット等を、交流活動後のレポート執筆時を含め、いつでも 1 カ所で参照できるというメリットが大きい。しかし、初めて iPad 上で Moodle の Forum や Chat などを多用した2013年度は、利用したバージョン（2.4）ではモバイル対応がまだ不十分であることが判明し、特に Forum での日本語入力はストレスが大きいことから<sup>(3)</sup>、ノート PC も必要に応じて併用することとした<sup>(4)</sup>。

2013年度に利用した Moodle の Chat については、前述のような利点がある一方（3.2.2）、接続状態がよくない場合は、入力と表示にタイムラグが生じることがあり、これがミスコミュニケーションにつながりうることが観察された。

#### 3.3.2. Skype

Skype での会話は、2012年度は主に本学実習室の Wi-Fi 環境の確認不足のために、2013年度は主に台風の影響による中国側のインターネット環境の悪さのために接続トラブルが生じた。2012年度は、代替手段の利用（学生の携帯電話や筆者所有の Wi-Fi ルーター）や、ビデオ通話から音声通話（あるいは文字でのチャット）への切り替えでしのぎ、2013年度は全体スケジュールを調整して翌週も Skype 会話の時間を確保した。Skype の利用にあたっては、事前テストはもちろん、代わりの手段や課題を用意しておくこと、また教員間の打ち合わせによる調整が極めて重要である。

#### 3.3.3. iPad

iPad の利用に関しては、1 対 1 以外でも柔軟に、また手軽にビデオ会話が楽しめるという点で、Skype にはデスクトップよりも向いている。また動画作成も極めて容易であり、映像を扱うタスクでは iPad の強みが発揮される（山内・Stout, 2002）。ただし、iPad で作成した動画はそのままでは Windows では見られないこともある。Moodle にタブレットやスマートフォンから動画を提出できるプラグインもあるのだが、2013年度はうまく使

(3) iPad では日本語入力用キーボードとしてローマ字変換用と五十音順のものが利用可能だが、フリック入力にしか慣れていない学生は五十音配列のキーボードを使おうとするようで、このことも入力のストレスを増していたと思われる。

(4) 最近公開された Moodle 2.6ではモバイル対応が改善されているようであり、最新版への更新後、日本語利用の場合の動作を検証する予定である。

うことができず<sup>(5)</sup>、映像利用については課題が残った。

### 3.4. 日本語による異文化交流活動の有用性

前述の通り、2012年度は、学生の学びと交流活動に対する意識を把握するために、9週目に交流を振り返る Forum 投稿と、学期末の日中交流・文化比較に関するレポートの記述を利用した(2.2)。いずれの課題でも、Forum での文字での交流と Skype での会話の双方を通じて感じたこと・学んだことをまとめるよう指示し、レポートについては「自分の参加の仕方、日本語を母語としない人とのコミュニケーションについて考えたことを含む」よう推奨した<sup>(6)</sup>。この節では、これらの記述に基づき、日本語による異文化間交流活動の有用性を検討する。

2012年度の参加者19名分の Forum 投稿とレポートの記述（日中比較はのぞく）を内容ごとに細分し、分類基準を調整しつつ、また書き手の重複をチェックした上で分類したところ、半数以上の学生が言及している内容として下記の6つが抽出された。実際の記述例もあげておく。

#### ① 他の文化や異文化コミュニケーションへの関心が高まった（84%）

中国だけではなくほかの国ともどんなところが同じなのか、またどんなところが違うのか見てみたい／中国に行ってみたくなった／今度は英語のみを使って外国の人とコミュニケーションをしたい／中国語など日本語以外でも誰かとこのようなコミュニケーションが取れるようになりたい

#### ② 中国人の外国語運用に感心した（74%）

話しやすい話題から少しずつとはいえ、母国語ではない言葉を使って、異文化の人と積極的に交流しようとする姿勢はすごい／UNNC の学生は英語を出来て当たり前の上で日本語の勉強をしているのだと気づき、英語は当たり前でさらにもう一国語喋れなければいけないと感じた／向こうの人は日本語をととても上手に話していた

#### ③ 中国人の会話を進める積極性やコミュニケーション能力に感心した（68%）

間が出来るとすぐに違う話題を振ってくれてスムーズに会話が出来た／積極性があり、コミュニケーション能力に長けている。次々と質問が出てくる／顔を見て話すというのは恥ずかしかったけれど、中国人は恥ずかしがらず積極的に話しかけてくれたので話しやすかった／UNNC の方に助けられた。もし相手が日本語を使えなかったらほとんど会話が成立しなかったと思う／UNNC の人達は私よりはるかに積極的にコミュニケーションしようとしていると感じた

#### ④ よい経験になった・楽しかった（63%）

自分とは全く違った環境で育った人とコミュニケーションをとることはとても新鮮であり興味が持てた／この交流地味に面白さがあった

(5) このプラグインの動作検証は現在とりくんでいるところである。なお、YouTube 経由で動画を共有するという手段もありえるが、中国との交流では利用できない。

(6) レポートではアンケートから分かった日中の違いや共通点をまとめることも課したが、本稿では扱わない。

⑤ 中国人の日本文化への関心や知識に驚いた (63%)

共通の趣味や好きな俳優、ドラマなどで会話が盛り上がった。驚いたのは、日本の俳優やドラマを中国の学生の方達は数多く知っていることだ／中国の方は日本のことをたくさん知っていてとても驚き、またとても好感が持てた／中国の大学生は自分の国以外に異文化のことにも詳しく興味を持っている／違う国である日本についての関心が自分よりある

⑥ 日本語学習者とのコミュニケーションで難しかった点・気をつけた点 (53%)

中国人の人にも聞き取りやすいようにゆっくり、かつ丁寧な日本語で話した／始めはなかなか聞き取りづらかったが、どうしても聞き取れないときは、英語を少し使ったりして会話することができた／話しているときもう少しゆっくりお願いしますと言われた。母語が日本語でない人には、普段の話し方ではなく、ゆっくり相手が理解しやすいように話すべきだと思った／最初にフォーラムで交流するときに、日本語の選び方や敬語を使うか友だちと話している感じで話しているのか、漢字は使っているのかなど悩むことはたくさんあった／言葉のニュアンスのむずかしさを感じた。少しの違いで意味が通じなかったり失礼な言葉使いになってしまうので／当たり前で発音して通じなかったことにびっくりした

これらの記述、特に①～③を見ると、本学からの参加者は相手の中国人大学生と接することで、意識を外に向けるきっかけとなり、相手の外国語やコミュニケーションのスキル、積極性などからプラスの刺激を得ていることがうかがえる。また⑥からは、言葉が通じにくい状況でコミュニケーションを行うことが珍しい経験であることが推察され、その分、何とか理解しよう／伝えようと工夫せざるを得ない状況を経験することの学習効果は高いと思われる。こうした参加者の意識については、2013年度について同様の記述の分類とアンケート調査をふまえてあらためて検討することにした。

一方で、「異文化間能力 Intercultural Competence」(他文化の人と母語でやりとりする能力) (Byram, 1997)<sup>(7)</sup>の点からこれらの記述をみると、その基本要素と言える「開放的で、好奇心をもって他者と関わろうとする態度」や「社会・文化・インタラクションについての知識」の面での未熟さに気づかされる。交流前に、交流相手の文化や社会について事前に情報収集をさせる (cf. ⑤)、言語学習者の言語運用能力について考えさせる (cf. ⑥)、また、自分からも話しかけ会話を続けていけるよう、自分や自文化について何を話したか、相手に何を聞きたいか考えさせる (cf. ③) など、ある程度の準備活動が必要であることも示唆される。

(7) Byram の「異文化間コミュニケーション能力 Intercultural Communicative Competence」(ICC) のモデルでは、ICC は「他文化の人と外国語でやりとりする能力」と定義され、「異文化間能力」とは区別される。「異文化間能力」に「外国語の言語力」(言語的能力、社会言語能力、談話能力)を加えた能力が ICC である (1997:70-73)。なお、「異文化間能力」は、「態度」「知識」「解釈と関連付けの技術」「発見とインタラクションの技術」「批判的文化アウェアネス」から成る。

## 5. おわりに

本稿では、2012年度および2013年度に実施した日中異文化交流プロジェクトについて中間報告を行った。2013年度の参加者のレポート記述およびアンケート調査結果を含んでいないため、暫定的な評価ではあるが、在外の日本語学習者との異文化接触が外への関心を引き出すプラスの刺激となり、同時に普段意識にのぼることのないコミュニケーション過程を相対化する契機となりうると考える。ただし、本研究では、相手国についての関心の度合いや知識の程度、またなじみのない相手とやりとりをする・自分から話題を出す・相手の発言を受けて会話をつなげるといったスキルに対する自己評価について、事前調査を行っていない。今後の交流実践では、事前事後の意識調査の比較により、交流活動の学習効果の測定を試みる予定である。

メインのコミュニケーション活動の前にプレタスク（最初の関係作りのための活動や、共同リサーチの前の異文化比較アンケート）を用意し、同期型・非同期型コミュニケーションを組み合わせる設計については、概ねうまく機能したと思われるが、両年の比較から「自由」にまかせる交流よりも具体的なタスクを課す方が、参加頻度の増加につながる事が確認された。必須課題としての「交流活動」から、自発的なやりとりが発生することも期待したいところであるが、これについては今後の課題としたい。

英語での同種の交流活動を実施しようとする場合、学習者の英語習熟度が最も不安を感じる点である。しかし、本実践における Skype セッションに対する好反応を見る限り、身の回りのことや好きなことなどを話すだけでも十分に興味深い異文化交流になりうる。特に、本実践のように、同期型コミュニケーションに入る前に、自己紹介や自文化紹介の交換をしておき、また相手への質問をあらかじめ準備しておくことで、身近なトピックでのコミュニケーションは、本学の学生にとっても、語彙を増やす必要はあるものの、十分射程範囲内であると思われる。

むしろ、アウトプット自体に慣れ、相手の発言を受けてコメントや質問を返したり、何と言ったのか聞き返したり、相手に伝わらなかったことを言い換えたり、といった談話スキルを鍛える必要があるように思う。また、同期型コミュニケーションを行うには音声処理のスキルも英語でのタイピングのスキルも不足している学生が多いように見受けられる。これらのスキルを伸ばす準備活動を考えていく必要があるが、その1つとして、授業内の対面での Chat 利用を検討したいと考えている。

## 【参考文献】

- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence: Multilingual Matters*.
- Jones, M., & Yamauchi, M. (2013). *Implementation of Intercultural Telecollaborative Exchanges*. Paper presented at the Moodle Research Conference 2013, Sousse.
- Mullen, T., Appel, C., & Shanklin, T. (2009). Skype-Based Tandem Language Learning and Web 2.0. In M. Thomas (Ed.), *Handbook of Research on Web 2.0 and Second Language Learning* (pp. 101-118): Information Science Reference.

- O'Dowd, R., & Eberbach, K. (2004). Guides on the Side?: Tasks and Challenges for Teachers in Telecollaborative Projects. *ReCALL* 16 (1), 5-19.
- O'Dowd, R., & Ritter, M. (2006). Understanding and Working with 'Failed Communication' in Telecollaborative Exchanges. *Calico Journal*, 23 (3), 623-642.
- Stout, M., & Yamauchi, M. (2012). Researching ICT Integration in Japanese EFL classrooms. *The Language Teacher*, 36 (3). Retrieved from Publications of the Japan Association for Language Teaching website: <http://jalt-publications.org/tlt/departments/tlt-wired/articles/1538-researching-ict-integration-japanese-efl-classrooms>
- Yamauchi, M. (2011). *Effective implementation of class blog in the traditional classroom setting: Toward more learner-centered EFL instruction*. Paper presented at the GloCALL 2011, Manila.
- Yamauchi, M., & Hashimoto, T. (2013). *Effective Implementation of Meaning-focused Output Activities for Japanese EFL Learners*. Paper presented at the JALT CALL 2013, Matsumoto.
- Yamauchi, M., & Jones, M. (2012). *Intercultural Telecollaborative Exchange between China and Japan*. Paper presented at the 1 st Moodle Research Conference, Heraklion.
- 山内真理, & Stout, M. (2012). 授業用 iPad の管理と利活用。千葉商大紀要, 50 (1), 83-100.



## 〔抄 録〕

本稿は、2012年度および2013年度に実施した、本学の日本人学生と中国の日本語学習者との日本語による異文化交流プロジェクトの中間報告である。この日中異文化交流は「異文化コミュニケーション」をテーマとするゼミの授業活動として実施した。交流のプラットフォームには Moodle を採用し、Forum や Wiki などの Moodle プラグインや、Skype などの外部ツールも利用して、同期型・非同期型双方のコミュニケーションを含むタスクを課した。この交流活動における、学生の参加状況を観察し、オンラインでのコミュニケーション活動の設計、および実施上の留意点を明確にすることが、本事例研究の主目的である。本稿では、日中交流プロジェクトの実施概要を示した上で、この交流プロジェクトについて、学生の活動状況、同期型コミュニケーションの教育利用、技術的問題、交流活動の有用性について考察を加えていく。ただし、2013年度の参加者のレポート記述およびアンケート調査結果を含んでいないため、活動実践への評価は暫定的となる。